

モノの価値

大人の目には何の値打もないモノでも、子供にとってはかけがえのない宝物になることはよくある。モノには本来の物質的な機能や金銭的な価値とは別に、人の心を惹きつけてやまない何らかの働きや価値がある。

宗教哲学者の鎌田東二は“もののあはれ”から“モノづくり”までを視野に入れた「モノ学」の研究で知られている。

鎌田氏によれば、日本語でモノという場合、そこには物質性＝物、人間性＝者、霊性＝霊（モノ）という3つのフェーズ（位相）が重なり合っている。

物的な位相とはモノと知覚・感覚にかかわる領域であり、者的な位相は、道具で物を作る行為、技術にかかわる領域など人が関与する。そして霊的な位相とは、もののけ・もの狂い・憑き物などシャーマニズム的なものにかかわる領域のことだという。

霊的というの一見、非科学的に聞こえるが次のような体験例がある。

先ごろ、50歳近くになる友人の男性が再婚を決意した。

彼には子がいなかったが、相手の女性には小学5年生になる少女がいた。

複雑な年頃のその少女は、なかなか打ち解けてくれなかった。

結婚式の少し前、引き出物の相談をするため新しく家族になる三人で大学時代の先輩を訪ねたが、行く道の電車の中でも少女は友人から少し離れて腰掛け、近寄ろうとしなかった。

三人で訪ねた先輩は縫いぐるみの玩具の製造業を営んでいる。

引き出物の相談が終わった帰りがけ、先輩は自社で開発したウサギの縫いぐるみを土産にくれた。

少女はこの縫いぐるみがとても気に入った。

うれしそうな少女を見て先輩は「好きなだけ持って行っていいよ」と言ってくれた。

少女は両手いっぱい色とりどりの縫いぐるみを抱えて、喜色満面だった。

帰りの電車の中、ふと気付くと、それまで一度も側に座ったことのなかった少女が、隣に座ってニコニコしながら縫いぐるみを撫でていた。

これから親子になろうとする二人の心の距離感を、縫いぐるみが一気に縮めてくれたのだ。

日本には古くから、モノにいのち（魂）が宿っているという思想がある。

モノは、私たちの暮らしを支えてくれる存在であり、感謝の対象にされてきた。

モノには、いのちや心が宿り、私たちとの対話があるという考え方がその背景にある。

職人たちの世界で、毎年、使い終わった針や筆、道具のようなモノにも霊魂が宿っているとして針供養や筆供養などの感謝の気持ちを表す神事が行われるのも、その表れである。

職人たちにとってモノは合掌の対象である。

彼らが自分の道具や作り上げたモノを大切にするには、モノづくりという仕事を通じて、自分らの思いをモノに託し、モノに感情移入するからである。

そこに作り手の思いや魂が込められているからこそ、人を感動させるようなモノが生まれてくるのだろう。

そのようにして、世の中に送り出されたモノには、作り手だけでなく、そのモノの使い手の思いも入り込んでくる。

参考著書「モノづくり原論」東洋経済新報社より

コメント

あなたが売っている「モノ」は何ですか？

そんなテーマで研修をすることもあります。

物質的な機能の「モノ」を、情緒的な「価値」を、いかに付加価値をつけるか？が鍵となります。

その原点は“もののあはれ”なんだね。